

主 題：生活の聖さを追及する 3

聖書箇所：ペテロの手紙第一 1章19－21節

救いの代価は決して安いものではありませんでした。私たちはそのことをいつも覚えておくべきです。どれほどの犠牲であったか、聖書はそれをくり返し教えています。私たちはその犠牲によって神に愛されていることを忘れてはならないのです。

ペテロは私たちにくり返し教えます。神の恵みのすばらしさ、そして、その恵みにあずかった者はどのように生きてゆくのかを、1章の初めから見てきました。

この1：18,19では、神の犠牲の大きさについて語っています。そのためには当時の文化、生活の習慣を知ることが必要です。「贖い出す」とありますが、私たちがこのことばを使うことは稀です。これは古代ローマの奴隷制度が背景にあります。実際に奴隷の売買が行なわれていたので、人々にはよく分かることでした。この当時、初代教会の構成メンバーというのは、自由人、奴隷から解放されて自由とされた人、そして奴隷、の三種類の人たちで構成されていました。なぜ奴隷となったのか、捕虜になったから、自ら、また親から身売りされたことによって、などですが、奴隷である人はその束縛から解放されることを望んでいました。お金が支払われることによって自由にされるわけで、働いてお金を貯めてゆくか、また、誰かが支払ってくれることによって解かれるのです。

私たちは「先祖から伝わったむなしい生き方から贖い出された」と18節にあります。むなしい生き方、罪の力から救い出されたのですが、そのために支払われた代価というのは、金や銀というこの世では高価であっても朽ちてゆくようなものではなく、イエス・キリストの尊い血なのです。18,19節ではこの世の価値あるものと、キリストの尊い犠牲とを比較してこの代価について説明しています。私たちはどれほど価値あるものによって救われ、愛されているのかを覚えることです。この世のどんなに高価なものであっても、私たちを罪から救い出すことはできない、それができるのはイエス・キリストだけだとペテロは言うのです。なぜ、そう言えるのでしょうか？

☆どうして、イエス・キリストだけが罪から解放してくれるといえるのでしょうか？

1) イエスだけが完璧ないけにえだから 19節

「いけにえ」は「傷もなく汚れもない」ことが条件でした。この当時の人々はそのことがよく分かっていました。旧約聖書から教えられてきたことは、罪の赦しのためにはいけにえが必要であるということでした。ヘブル9：22に「それで、律法によれば、すべてのものは血によってきよめられる、と言ってよいでしょう。また、血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。」とある通りです。ところが、同じヘブル10：4には「雄牛とやぎの血は、罪を除くことができません。」とあり、このいけにえではあなたの罪を完全に赦すことはできないと言っています。これはどういうことでしょうか？ その前の3節に「ところがかえって、これらのささげ物によって、罪が年ごとに思い出されるのです。」とあります。これは私たちがどれほど罪深い存在であるかを悟るためなのです。何度も何度も罪を犯すからです。人々はいけにえをささげることによって、自分の罪深さを悟るのです。いくらいけにえを捧げても罪から逃れることはできないのです。私たちに大切なことは、正しく自分自身を知ることです。そして、自分の力で自分を救うことはできないと知るので。ゆえに、人々は完全ないけにえ、自分の罪を完全に贖ってくださる方、救世主が来てくださることを待望したのです。ですから、イエス・キリストがこの地上に来られたとき、そして、公の生涯を始められたとき、バプテスマのヨハネはイエスを見て、このように言いました。ヨハネの福音書1：29「見よ。世の罪を取り除く神の小羊」と。イエスこそ人類の罪を救うために神が送られた完全ないけにえであると知ったのです。

また、ヘブル9：26には「もしそうでなかったら、世の初めから幾度も苦難を受けなければならなかったでしょう。しかしキリストは、ただ一度、今の世の終わりに、ご自身をいけにえとして罪を取り除くために、来られたのです。」とあります。キリストは動物のいけにえとは違うのだ、キリストはただ一度だけ、ご自分のいのちを捨てることによって、人類に完全な罪の赦しを与えようとしたのだと教えるのです。

19節の後半にある「尊い血によって」とは、イエス・キリストの罪のないいのちによって、という意味です。「血によって」はイエスご自身がいのちを捧げられることによって、と死を意味するのです。

2) イエスこそ神が備えられた救世主である 20 節

神が定められた救世主です。20 節「キリストは、世の始める前から知られていましたが、この終わりの時に、あなたがたのために、現われてくださいました。」。「世の始まる前から知られていました」とは、「神の予知」です。神は人類の救いの計画の全貌をもう知っておられたというのです。神は罪人を救おうといつ決められたのか、世の創造前から定めておられたということ。私たちは過去、現在、未来という時間の感覚で測りますが、神にとってはすべてが「今」です。神は時間を超越したお方だからです。この神が、私たちの救いのためにイエス・キリストをこの地上に送ろうと、世界の創造の前から決めておられたのです。ペテロが初代教会で最初にメッセージをしたとき、このように言っています。使徒の働き 2:23「あなたがたは、神の定めた計画と神の予知とによって引き渡されたこの方を、不法な者の手によって十字架につけて殺しました。」と。すべて神の計画だと同じことを言っています。

3) イエスは神がこの世に送られた救い主である 20 節

「この終わりの時に、あなたがたのために、現われてくださいました。」、この「終わりの時」の「時」は複数です。1:5 に「あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりのときに現わされるように用意されている救いをいただくのです。」とありますが、この「おわりのとき」は単数です。これは私たちがイエスとお会いするそのときです。ところが、20 節の「時」はイエスがこの世に来られて天に凱旋されるまでのすべての時です。長い時間を現わすため複数形になっているのです。そして、もうその時は終わりました。人々が待望していたその時が終わったのです。イエスが人としてこの世に来られたからです。だから、ここで「現われて」とあるのです。これは「目に見える」という意味です。目に見えない霊なる神が、目に見えるかたちで私たちの中に現われてくださった、その意味です。そして、これは「あなたがたのために」、この「私」のために来られたのです。なぜなら、救いは個人的なものだからです。ガラテヤ 2:20 を見てください。「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」と、「私」と書かれています。イエスを個人的に自分の救い主として信じ、受け入れるのかと問われているのです。

☆キリストだけが唯一の救い主であることの証明 21 節

21 節「あなたがたは、死者の中からこのキリストをよみがえらせて彼に栄光を与えられた神を、キリストによって信じる人々です。」キリストだけが唯一の希望であり、救いであることの証拠は二つあります。一つはイエス・キリストの復活であり、もう一つはイエス・キリストの昇天です。

「神」は、「死者の中からキリストをよみがえらせ」、「キリストに栄光を与えられ」ました。父なる神のみわざなのです。神がこのキリストを救い主とされているのです。イエスが死からよみがえって来られること、それはイエスが人々に何度も教えてこられたことでした。弟子たちにも十字架にかかって死ぬこと、そして三日後に必ずその死からよみがえることを言われていました。もしそれが起こらなかったら、イエスの言っていたことが「うそ」だったとなります。イエスが言っておられた通りに、父なる神が彼をよみがえらせたということは、イエスが話してきたことがすべて真実であることを証明するものです。イエスはあなたを救うためにこの世に来られた、これが神の救いのわざです。そして、イエスをその死からよみがえらせることによって、キリストこそ人類にとって唯一の救い、望みであると神が明らかにされたのです。そして、イエス・キリストはかつてもっておられたその栄光を再びもち、神の右の座に着座されたのです。イエス・キリストは神であるゆえに、神にふさわしい栄光のもとへ戻られたのです。これら一連のことは神のわざです。

「…神を、キリストによって信じる人々です。」とありますが、これはイエス・キリストを信じたことは、同時に父なる神を信じたことになるのだということです。三位一体の神を信じたことになるのです。そして、最後に、この救いの結果、私たちに何が与えられたのかを教えます。「このようにして、あなたがたの信仰と希望は神にかかっているのです。」とありますが、この「かかっている」とは「～に基づいている」という意味です。「神に基づいている」、私たちの信仰と希望は神にあるから、決して失うことはない、神によって保証されているという約束です。これこそ本当の救いです。

まだ、信仰をもっておられない方、罪を悔い改めてイエス・キリストを救い主と受け入れてください。イエス・キリストを信じておられる方々、この十字架こそクリスチャンの原動力です。多くの信仰の勇者もそのように歩んできました。

フランシス・ハーバガルという人は与えられたすべての能力を神のために捧げようとしてきました。43 歳で召されるまで、主に対する幼子のような信仰と信頼をもって歩み、多くの実を結びました。デュッセ

ルドルフで学んでいたとき、町の美術館でスタンバーグによって書かれた有名な絵「この人を見よ」を見て、その前から動けなくなりました。それは、イエスが裁判官ピラトとユダヤ人群众の前にいばらの冠を被らされたイエスの姿が描かれていました。その絵の下には「わたしはあなたのためにこのことを成した、あなたはわたしのために何を成したか」と書かれていました。その場で彼女はそれによって詩を書きました。それが讃美歌 332 です。

主はいのちをあたえませり、主は血しおをながしませり。

その死によりてぞわれは生きぬ、われ何をなして主にむくいし。

わたしはわたしのいのちをあなたに与えた。わたしの尊い血をあなたのために流した。それはあなたが贖われるため、死からよみがえるためだった。わたしはわたしのいのちをあなたに与えた。あなたは何をわたしのために与えてくれたか。… 彼女が十字架を見上げてこのような詩を書いたのです。

私たちの日々の歩みはどうでしょう？「あなたはわたしのために何をなしたか？」、この質問に答えるのは私自身です。